宮北千織 日本画展
―らしく―

【会期】7月25日（水）～7月31日（火）
【会場】天満屋岡山本店 5階美術画廊

【会期】9月5日（水）～9月10日（月）
【会場】天満屋福山店 6階美術画廊

【会期】11月7日（水）～11月12日（月）
【会場】天満屋広島八丁堀ビル 7階美術画廊

【会期】12月5日（水）～12月10日（月）
【会場】天満屋米子店 3階美術画廊

「華燭」20号F

女性像が宿す気品

日本美術院を中心に活躍する日本画家・宮北千織の、中国地方では初となる大規模な個展が開催される。

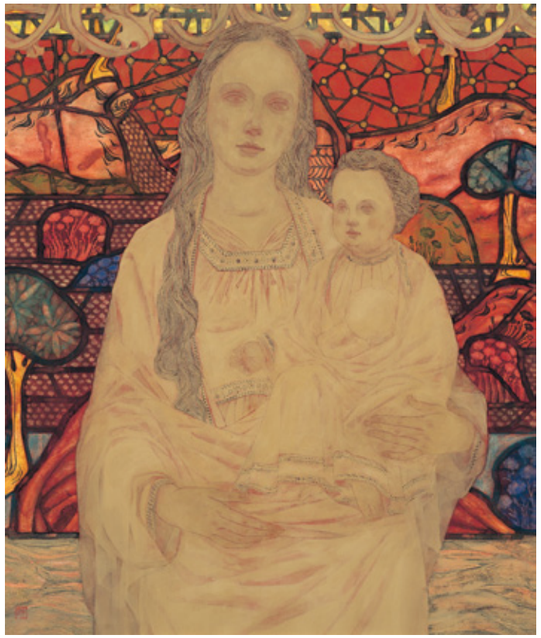
出品作品をいくつか挙げながら、宮北作品の魅力に迫ってみたい。ウエディングドレスを纏った女性を描く「華燭」は、2014年の院展で文部科学大臣賞を受賞した「佳き日」に続き、宮北が近年継続して取り組んでいるモチーフである。純白の花嫁衣裳が胡粉を薄く重ねることで表現され、ヴェールの向こうに透けて見える花嫁の横顔は、穏やかでありながら凛とした気高さも漂わせている。彫刻が施されたような背景は、古代の壁画を思わせる味わい深いマチエールに加え、連続する文様のリズムが美しい。

今回の展覧会名のサブタイトルである「らしく」とは、自分らしさを出すような展覧会にしたいという、画家の想いが込められている。宮北は自身の作品の特徴として、「色ぶつけ」をひとつの大きな要素として挙げる。「色ぶつけ」とは、画家の言葉を借りれば「その色自体のもつ魅力だけでなく、隣り合う色同士の響き合いによって、より美しく見せること」ことを指すという。左頁に掲出した「聖母子」や「らしく」の背景には、ヨーロッパで取材したという教会のステンドグラスが鮮やかに描き出され、作品に色彩の躍動感をもたらしている。一方「ため息の森」では、白い息を吐く少女の背景に自然風景が描かれるが、その衣服にはまた異なる情景が滲み出すように拡がっている。日本画材のもつ豊かな風合いと相まって、画面の中で重なり合う様々なイメージが、心象風景のように立ち現れる。「寒い冬の日に、勤務先の大学にある庭園で白い息を吐きながらスケッチした作品。冷たい空気を吸いながら、考えに耽る時間が昔から好きです」。さまざまな情景の中で描かれる自然体の女性像は、これまでに数多くのファンを惹き付けてきた。

一貫して人物表現に取り組んできた宮北だが、きっかけは近代日本画壇の重鎮・前田青邨の一枚の絵だった。

「予備校時代、青邨先生が香淳皇后を描いた『ラ・プランセス』を画集で目にしました。決して描き込んでいるわけではないのに、ふわっとしていながらも強い。なんて不思議な作品だろう、これが『画品』ということなのかと衝撃を受けました。青邨先生の作品に出会ったことで、日本画で人物を描いてみたいと強く思う

「ため息の森」10号F



「聖母子」101×86cm　第71回春の院展出品作

「らしく」20号F

「想」10号F

「佳日」6号F

ようになりました」

東京藝術大学大学院を修了した1994年に院展へ初入選を果たし、2007年には藝大出身の女性画家として初めて同人に推挙。現在に至るまで、内閣総理大臣賞、文部科学大臣賞、足立美術館賞ほか、受賞を重ねてきた。人物を描く画家は数多くいる中で、なぜ宮北作品が高く評価されるのか？　それは、かつて宮北が感銘を受けた前田青邨の作品に漂う「画品」、すなわち描かれた人物の品格が、宮北の描く現代の女性像にも共通して感じられるからではないだろうか。容姿の美しさにとらわれない、女性の内面から滲み出る高潔さや気品。それは幼い少女像でも同様であり、宮北の描く少女たちは、単に可愛らしいだけの存在ではない。たとえば先にも触れた「佳き日」では、自身の姪をモデルに結婚式のフラワーガールをモチーフに描いているが、少女は花嫁を導くと同時に、行く手に花を撒き清め、厄除けを担う存在でもある。

「幼い少女であっても、彼女たちはすでにある種の強さ、なにかを跳ね返す力を宿していると感じます。そうした少女のもつ強さを、私の描く人物画でも表現したいと思いながら制作しています」

そもそも前田青邨という画家は、人物画や歴史画を数多く描く一方、法隆寺や高松塚古墳の壁画模写に携わる中で、日本画とは何かを追求し、戦後日本人の内面に立ち返った画家といえる。その前田青邨の作品に出会い、人物を描き続けてきた宮北が、人物の内面、そこに宿る品格を制作の主題に据えたのは必然といえよう。いずれは前田青邨のように色彩を多用しない人物表現にも挑戦してみたいと語る宮北だが、今回の個展では、現時点での画家らしい、色彩の魅力に溢れた作品が一堂に並ぶ。出品内容は、女性像を中心に、昆虫や苔、日光などの自然にインスピレーションを受けた作品や、花をモチーフにした作品など、100号の大作から小品まで約20点が展覧される。会場となる岡山天満屋は、院展の巡回先として例年多くの観客を動員しているが、夏と正月に開催される院展、そして宮北作品の多くが収蔵されている足立美術館で、作品に触れた当地の美術愛好家も多い。岡山での開催後、福山、広島、米子の3会場へと巡回する。宮北作品を中国地方でまとまった形で紹介するまたとない機会とあって、ファン必見の展覧会となるだろう。

（編集部）

みやきた・ちおり
1967年東京都生まれ。97年東京藝術大学大学院博士後期課程満期修了。2002・17年院展足立美術館賞、15年内閣総理大臣賞。現在日本美術院同人、文星芸術大学教授。